

生き方を考えさせてくれる『論語』

二十五日から、準備登校を開始することになりました。メルマガやHPから情報を得て、着実に準備してね。さて、今日は三年生だね。一、二年の教科書では、日本の古典と中国の古典がセットになっているけど、三年の教科だけは違っています。日本の古典から離れ、三十二ページから「学びて時にこれを習ふ」と題して、『論語』が載っています。

最初の単元のタイトルの中に「生き方を考える」という言葉が入っているので、古典教材というより「生き方を考える教材」という位置付けなのかもしれないですね。『論語』という書物は、まさしくそれに値するものです。

十一日のメッセージで、『詩経』の話をしました。忘れてしまった人、まだ読んでない人は、ぜひそこから読んでほしいね。実は、この『詩経』を作ったのが孔子という偉い先生です。そして、この孔子やその弟子たちの教えや言葉、行ったことが収められているのが『論語』なのです。教科書には、その中の孔子の四つの言葉が載っています。

『詩経』の説明にも書きましたが、皆さんに当たり前に考えてほしくないのが「日本との差」です。孔子が活躍していた当時の日本では、人々は土器を作っていました。先生と弟子というような人間関係や、文字を駆使して記録したものなどもなかったのが当時の日本です。

そう考えると、中国の歴史の奥深さが実感できますよね。より高い価値を求めて学ぼうという姿勢が当時の中国の人々にはあったということですから。再び言いますが、当時の日本人は土をこねこねしていたのですよ。

そうになると、『論語』は当然日本にも大きな影響を与えます。時代劇を見ると、武家の子どもが正座して大きな声を出して音読しています。あれは『論語』を筆頭に、中国の思想を勉強しているシーンです。

『論語』は西暦三九〇年頃、漢字や仏教と共に日本に伝わり、聖徳太子や空海も勉強したと言われています。それが現在では、漫画という形になって、北中の図書室の中にも入っています。知っていましたか。

次は孔子の言葉について書きますね。



(五月十三日)